

Wat00041 <Journalism Inside3>新人記者とカルチャーショック
#0000 dando 8809191833

<Journalism Inside3>新人記者とカルチャーショック

b y 大阪科学部・団藤

このシリーズ第3回は、極めて私的な新人時代の体験記です。このボードで、どなたかから「スーパー記者養成計画」を書いていただけると予告されたので、楽しみにしていたのですが、なかなか現れません。それでは、というので、現実がどれくらい泥臭いか、ぶちまけてしまおうーとのイジワルです。これを読めば、スーパー記者なんていう発想が霧散してしまうでしょう。

なお、わたし以外の記者の方は、もっとスマートで、洗練された新人記者教育を受けられたかもしれませんから、これはあくまで極私的です。念のため。

#0001 dando 8809191835

わたしの新人時代は2回ありました

b y 大阪科学部・団藤

わたしは、ソアラという車が、どうも好きになれません。「NAV I」というクルマの雑誌に、この「高価」国産高級車のはしり、ソアラについての面白い統計が載っていました。ソアラ2代目発売の86年春に比べ、この88年夏には売れ行きが全国平均で半分に落ちました。その中で、売れ行きがあまり落ちていないのが千葉、茨城、埼玉など、がたんと落ちたのが青森、北海道、高知など。雑誌の分析は、大都市でも落ちているのに、その周辺部で売れ続けている現状に焦点を当てていました。「高級」という価値観が多様にある大都市では、もはや高級車として耐えられないのに、周辺部では高級車として安心して買われていると。しかし、わたしは、売れていない地域に注目します。ここはお金が無い地域だからか。そう

は思いません。特に、青森と高知には、皆さんが想像もしない共通点があります。新人記者修行に欠かせない「サツ回り（警察担当）」の最もやりにくい県が、このふたつだといいます。そして、わたしは高知で実質的な新人時代を過ごしたのです。変なイントロを振ってしまいましたが、わたしが経験したカルチャーショックの旅にご一緒下さい。

朝日の場合、新人は原則として東京本社が一括採用し、名古屋、大阪、西部（北九州）の各本社に適当に（何かのアルゴリズムはあるのでしょう）配属します。それから、各本社はまた適当に各地の支局に配属して、新人記者修行がスタートします。このとき、出身県には出さないのが原則です。それが、私の場合、ちょっとした人事の手違いで、東京で6年間の学生生活をした後、まず、出身の岡山支局に赴任してしまったのです。初めて行った支局で、一部にせよ先輩よりも土地の事情に通じているなんていうのは、いけませんね。おまけに、直接、間接の知り合いが多すぎます。新鮮で無さ過ぎました。

とりあえず、ここでサツ回りを1年5カ月続けました。岡山県は全国的にみて平均的な規模であり、自治省の元事務次官が知事をしているという事情もあったのか、役所の運営などいろいろなものが「標準的」とされる県です。岡山では毎晩のように飲み歩いたりして、随分無茶もしました。未明にアパートに戻って、気が付けば、もう陽は高く、慌てて岡山西署の仲良しの次長に「すみませんが・・・」と電話すると、「大丈夫。あんたの持場の東署や南署の方も夕刊に出るような事件事故はないようだよ」と言われ、ほっと。まあ、これは一度きりでしたが・・・。

そして、異例に短期間で高知支局に転勤です。だから、わたしには新人時代が2度あったと思っています。高知でもサツ回りを始めて、愕然とします。毎朝、警察署に行くと、発生した事件、事故をまずおさえるのが、仕事の第一歩なのです。岡山では簡単でした。署の次長の所に、規格化された広報用の報告が集まっているからです。高知では、まず、その報告がありません。やむなく、刑事一課、二課、防犯、交通・・・と各課を回ります。それも課長をつかまえばオーケーという甘いものではありません。各課に何人もいる係長に聞かないと十分な情報にならないのです。でも、これだけのことなら愕然とはしません。

ちゃんと顔を合わせて、「昨晚は、事件はありませんでしたか」

と尋ねたのに、教えてくれない刑事さんがいるのです。各課を回り終わって、県警本部に詰めているサツキャップに「特別なものはありません」と電話連絡すると、「こんな事件があったろう」と問い返される。「そんな」と、階段を駆け上がって、当の係長に問い詰めると、「おまんが、もうちくと、ここにいたら、教えようと思うたけんど」ときます。岡山と違って、二日酔いの朝、次長に電話してもどうにもならない訳です。警察内部でも、かなり下部への分権が強いようです。日常の取材ですらこの有り様ですから、特ダネを狙おうという取材はもっと大変です。同じころ新人になった地元出身の地元テレビ記者ですら、まず署内に遠縁でもいいから親戚はいないか、と探していました。われわれには、もちろん親戚はありません。

次にびっくりしたのは、火事場です。火事は写真が第一、記事は消防に聞けば、簡単に書ける――これが常識です。岡山なら、火事現場に突っ込むと消防の指揮車を探します。車の側面にホワイトボードが掲げられて、出火時刻などがもう書き込まれ始め、いろいろなデータが分かり次第追加されていきます。いい写真を撮るのが一番になれる訳です。ところが、高知では、指揮車のそばにいても何も分かりません。もちろん、締め切りが終わってしまうまででも待てれば、情報が集まりますが、無意味です。ではどうするか。集まった各社の記者が共同で現場周辺で聞き込みを始めます。出火現場はどこか、だれの家か、家族はどうして逃げたか、出火の状況は・・・聞いて回ります。一息つくと、各社集合して、情報を交換、記事として書くための最低限のものを確保します。何のことはない。高知では、記者が聞き込みして回った状況を、警察、消防の調べとして、支局に電話で送ってしまいます。往々にして、それが紙面に出版します。

岡山では「大阪紙」くらいに言われたものが、高知では、朝日新聞は「県外紙」と呼ばれます。地元の高知新聞以外はどれも同じです。この言葉を始めてわたしに浴びせたのは、なんと20歳代の若い女性でした。ある警察署で、事故の取材をしようとしたとき、たまたま現場を見たのが、署の交通巡視員だと分かりました。そこでたずねて行くと、「県外紙には言われん」とぴしゃっとやられました。高知新聞は、能力のある記者をけっこう多く抱えた良質の地方紙だと思います。おまけに、「県紙」を大事にしようとするこの地元意識。ある先輩は「ひとつなぐったら（特ダネを抜くと）、ほか

ぽかと5つ6つなぐり返される」と表現しました。これだけのハンディキャップを背負っての記者修行が、高知では今でも現実だと思えます。昨年秋、新人の半年研修で大阪本社に来た、高知支局の記者に聞いた限りでは、事情はそう激変していないようでした。

新人は田舎から、より都会へと転勤するのが普通のパターンです。逆コースを経験したために、わたしのカルチャーショックは普通以上に強烈になってしまいました。新人記者修行は、こうしたカルチャーショックを織り込んだものだと思います。東京だけで生まれ育った人には、「岡山」がなくても同じでしょう。そのカルチャーショックをきっかけにして、われわれは、いろいろなものを見、人を知り、ダウン・トゥー・アースな生き様を学びます。今回は、土佐の人と風土について書いてみましょう。このネットへの積極的なかわりは、9月末までと決めているので、もうあまり多くは語れないでしょうが。

#0002 sci1082 8809201052

団藤さん

笑いこけながら読んでしまいました。県外紙という言葉は私も初めて聞きました。まあ、こんまい記事は地元紙に任せておけばいいんでしょうが、つらかったでしょうね。免許の更新以外はなるべくお世話にならないように気をつけていたつもりですが、先日、右折禁止違反で捕まってしまいました。「いごつ」の虫を起こさないように従順に対応しましたが、向こうも最後に「気をつけて」なんて、気をつけていました。

サイエンス記事について、「地元紙」もけっこう頑張ってます。「共同」の記事をそのまま載せるのでしょうが、朝日が週2回半面に対して週1回1面、大きい分だけ解説などには朝日の説明不足を補っていることもあります。だいぶ前ですが、フロン[®]の代替品にフロン[®]の時は、地元新聞で仕入れた知識だったのですよ。ネイチャーに日本人の記事が載るときはかなりこまめに出てきます。記事の価値判断を権威ある科学雑誌に委ねるところなどは、なかなかにくい技です。

マスコミの地元指向というのは、どこでもあるんじゃないですか。ある日本人が、ネイチャーにでた、米国研究機関の求人広告を見て、照会したら、ヨーロッパ人を取りたいのだと返事が返ってきたそうです。ネイチャーはヨーロッパの「地元誌」、サイエンスは米国の「地元誌」というような色分けが科学の世界にも存在するようです。
Tokio

#0003 dando 8809291943

ちょっと種明しをすると、「ネイチャー」に日本人の論文が出る時には、サービスで教えてもらえるんですよ。

高知からのアクセスが、Tokioさんしか居ないと分かっているので、このシリーズ、書き易かったな。いろいろと時効になっていない問題もあってほかしましたが・・・。

伊勢海老のフルコース、貝類の海賊焼き、ゲテモノふんだんのジンギスカン屋さんーが、高知時代に、遠方からお客さんが来た場合に連れて行く所でした。菊地さん、ご興味があれば、オフラインでお教えしますよ。もっとも有名な店も混じっているので、蛇足の情報になるかも。まあ、間違っても観光客向けの「高級」料理店には行かないことです。 (団藤)